

## 上野東照宮：透塀

上野東照宮の装飾を施した「透ける」フェンス（透塀）は、神社のメインの建物（社殿）を取り囲み、神聖な建物を俗世から分離しています。また、透塀に囲まれた区画は周囲の地面よりわずかに高くなっており、神社が外界から離れていることを強調しています。この塀は徳川家光（1604–1651）が上野東照宮を、徳川幕府を開いた徳川家康（1543–1616）を祀る

本社である日光東照宮の壮麗な姿を想起させる装飾的なスタイルで立て替えた 1651 年に建造されました。透塀の向こうが透けて見える構造は、社殿で祈りを捧げる位の高い人々を外にいる護衛が敬意を払えるようにと採用されたもので、日光東照宮の同様の塀に倣ったものです。ただし上野東照宮の塀は装飾の点において日光のものとは異なっています。

赤、緑、金から成る塀は 200 を超える彫刻に飾られており、上部は陸の動植物を、下部は海の生き物を描いています。社殿とその正面の唐門を飾るのは神話に登場する生き物や縁起の良い花ですが、透塀の彫刻は魚や小鳥、蛙、蝶といった、現実的でより見慣れたものとなっています。ナマズ、鯉、亀が彫られた塀の下部はとりわけ注目に値します。これらの生物は海が近かったことを表しているからです。1600 年代、上野は海が見える場所にあって、その海は江戸（現在の東京）の人々の多くに生活の糧をもたらしていました。この海との繋がりは、東京の北の山深い場所にあって海から 100 キロメートルほど離れている日光には見られないものです。

重要文化財に指定されているこの透塀は、その 350 年の歴史の中で何度も修復され、最近では 2009 年と 2014 年に修復されました。最近の修復は 17 世紀の手法と材料を使った忍耐強い作業であり、このことは過去にはたびたびないがしろにされましたが、現在では塀の元の姿を取り戻すことに役立ちました。